

(三)私の幼少時代

私は明治四十五年六月十五日に、古手伝町四十番地にて、次男として出生した。但し、戸籍届出は、大正元年八月十五日となっている。

父は当時、明治天皇御重態で余命いくばくも無いと報道されていたので、新しく生まれてくる子は新元号にて届出した方がよいと思ひ、待機していた。七月三十日御崩御、七月三十一日より大正元年と改号されたので、早速、新年号の第一の十五日、即ち八月十五日に届出したと聞いている。当時は出生届、婚姻届等の考え方はルーズで、夫々の都合で、多少延期しても祝祭日等縁起の良い日を選んで定めていた習慣だったそうだ。

幼少時代、私はたいへんにスロームーション型であった。身体も肥満型だったらしい。故になおさら行動が鈍く感じられたらしい。小学生時代、私の渾名は「小池のダブチャン」で通っていた。

八月のお盆に、一族打ち揃って毎年墓参りに行った。旧岩瀬街道を中島村に向け徒歩で行った。旧街道なので自宅から約四km位であった。私は歩き方が一番遅いので、皆の先頭を歩かされるが、何時しか遅れてしまい、一同を、私が追いかけて待たせた事をよく覚えてる。墓参りの帰りに、街道に在

った茶店で、湧き出している井戸水に冷やしてある「ところてん」を、食べるのが楽しみであった。

ご先祖様に申し訳無いが、その頃の年齢は「ところてん」を食べるのが楽しみの為、墓参に参加したのかも知れない。マイカー時代の日々では、想像も出来ない。

私の鈍牛型に対して、二才年下の常蔵弟は、愛嬌があり、小利口型で小回りが利く性格であった。

二人を対比して、父は私に「お前は何をしても遅い、回転が悪い、少し薄馬鹿だ」とよく叱られた事

祖父と母は、父に対し強く抗議したそうである。進学するにつれ、母からそんな話を繰り返す聞かされ、更に勉強に発憤を促された。

上手な教育方法だと、今にして思っている。私は、五年生は二等賞だったが、外は一年生から六年生迄、一等賞を受賞した。クラスの級長は、一年生から六年間連続して努めた。

私の家の真向いに、野上正則君の家があった。彼は、私のライバルであった。彼の父は指物職人で姉二人妹一人の姉妹で、一人息子

で育った。前にも書いた通り、当時は夫々の家庭で、アルバイト、街道掃除、散水等の賤があったが彼の家庭は、それらは全部姉妹に任せ、一人息子である彼は、朝食

と、良かったと感謝している。一等賞は各クラス二人で、彼は一番、私は二番であったが、級長は私であった。彼はやせ型で小柄な男であった。私は丸々と太っていて、「ダブチャン」と渾名の通りである。担任の先生の見解としては、野上君より私の方が、クラスを統率する能力があるからとのこと。クラスの腕白連も、ガリベン

型も、私の言う事はよく聞いてくれた事は、事実であった。五、六年生頃になると、私は中距離競走では、学校内で一番強く、

その他、走り幅跳び、高跳び等フイールド競技も優秀であった。中距離リレーでは、田畑正一君と組んで、富山市内の連合運動会にも出場して優勝した。

当時の愛宕小学校は、市内九校中、西田地方小学校と並んで常に一、二位を競う運動の盛んな学校として有名であった。春、年一回の連合運動会でも、私共六年生の時は、先年の雪辱を晴らし、私は全校生徒の代表になって、優勝旗を受領し奪還した。優勝旗を担いで校下を練り歩き、祝勝に気を吐

いた事もあった。六年生の頃は、成績は級長、運動は市内連合運動会での優勝組の代表で、私は登校、下校の途中、下級生は目礼して、私を送迎してくれた。私は得意然としていた。

秋季運動会には、他の小学校へ招待選手として、遠征に行き出場もした。大正十三年十一月十日に現天皇陛下が摂政宮殿下として御来県の際、愛宕小学校を代表して男子一人、県下で小学校生徒百数十名で、天覧体操にも出場した。

その頃から、「ノロマ」の汚名も、父に対し、返上出来るようになってきた。常蔵弟は、稲に例えると「早稲」とすると、さしあたり、私は「奥稲」に当たるのかも知れなかった。成人に成ってからは、忙しい事も手伝って、兄弟中で一番早口で、動作も素早くなって行ったらしい。幼少時代から私を育てて来た両親は、私の成人振りを見て、「あのノロマだった息子が、こんなに変わるものか」と、私の妻の菊枝に、幼少時代の思い出話を聞かせ、笑い話の種にし、繰り返して話していたそうである。

前にも書いた通り、良一兄は、強い近視のメガネを掛けた、色白な文学少年型で、物事に対し、消極的で物静かに反して、常蔵弟は色黒の明朗茶目気型で積極的開放型であった。両者正反対のタイプであった。私は、丁度その中間だったと言える。

いはいはものがたり 善之助翁記

を覚えている。祖父は反対で、「幼少の頃は、これで丁度良い。成長するに連れて回転が早く成って行く。常蔵は小利口過ぎる」と、何時も私を庇ってくれた。

私は、大正八年四月、愛宕小学校に入学した。一年生の時の二学期からは、一学期の成績順により級長に任命された。和服の胸に赤い毛糸で作ったリボンを先生から付けて戴いて帰宅した。日頃私を見限っていた父は驚いて、「先生の

間違いではないか、学校へ確認するように母に命じた」との事である。

一方、小学生時代から、商の道一筋に、学問は第二義的に、仕込まれて来た私の立場からすると、父の方針が、今日に至って考える